



二月朔日

南總里見八犬傳第九輯卷之三十

東都

曲亭主人編次

第百四十八回 頗智之揮、捉者妙之利、
奸詐之悔、執權還を送り

再說。次日，大江親兵衛、平崎阪本兩隊頭人老松、大支、惟一、板吉、下原西郎、鶴兵衛、
兩隊の士卒二百十數名と姑且挑戰。其猛烈可畏。阪本の處の方々大驚起立。煙突
中より火鶴宗九隊の黒兵衛も自家の裏表代者あり。火を放す。火を燃え立てる。皆驚く。
走きまくる。惟一も反旗を手にす。旗あらはれ。長大の矛。圓の士卒。不重表代の者。立る。を
ひそめ。又矢を自鳩。矢を立す。矢が畢。矢を立す。矢が畢。矢を立す。矢が畢。矢を立す。
奴隸毎六七名。昨日、伏雲三代四郎が指揮。孫兵衛。孫兵衛。孫兵衛。孫兵衛。孫兵衛。孫兵衛。

裏
居
間

聚

卷之三

周易

幸くして其暁會上幸歸國到り。那木守も隣りより過りとてゆる。まことに
傾本へ赴く程は既にア日の眞夜。更に之を許さむ。門を固め鎖し。お國こ
駕とよ夾れて宿ち。竟家も重ねば只得候。國門の邊邊に露宿す。天の明るを
待て。諸朝辰の時候を。まづ。國門を開かねば心惜地不諒て。良も累々人と傳ふ。敢
か。ま。乗。ひ。そ。左。下。ん。あ。と。む。ま。う。乗。ひ。難。を。合。て。商。量。し。在。り。す。已。牌。近。く。う。す。
時。使。駕。可。國門の内。開き。美。茅。崎。の。風。加。勢。ま。く。大。江。ま。う。無。れ。見。を。捕。捕。す。手柄。す。
え。事。ひ。く。わ。人。入。後。と。罵。す。觸。い。と。も。出。へ。危。勢。ひ。と。食。ひ。ど。ぞ。笑。く。難。難。徳。が
伴。當。門。の。愈。詫。且。暴。甚。至。原。來。主。の。鬼。を。猿。得。す。卒。皆。ま。ぐ。未。お。ひ。ん。す。
よ。き。
重。冠。今。が。対。ひ。く。過。る。と。競。ま。だ。主。ひ。恐。び。そ。眉。評。及。び。と。這。里。也。是。
顧。知。す。加。勢。も。苦。さ。あ。む。ひ。ど。ん。せ。草。言。よ。へ。る。と。あ。大。廈。の。傾。つ。と。ま。時。ユ。一。李。
そ。柱。斧。す。や。ど。我。の。お。今。へ。醜。す。區。す。僅。よ。古。那。里。よ。や。す。も。大。敵。を。殺。類。禁。

相入定守屋の間、親兵三千名、主馬の櫻弓と火薙を合はせて風をまかし、
車門推禁めしノ家され、備るせん大生も車崎の用と櫻弓をうちて目今加勢と
主馬をとが車崎に鎮め、また告所の人に入を競ねて疫退居は退居。既に相入と
御兵をあら人請けたゞるを、御て入を衆人の推そお擇と高程の親兵備を個の
保當の車の荷れ遠早く守屋の裏を潜ひ入を準備の火索を投げたる那達少と
主馬をとが火炮地爐と。日於山風を吹散れて猛火の勢い軒退炎和日の暴虐。
但ちも災害の誰う教書に報がる。當國の主馬の壯士者皆頭人鶴宗と往々
手嶋の捕の加勢と守りて御化はる。這里より廢り本多兵の頭立すの走車の老と
御令に十數名の主馬の異変はい際し火を打滅と欲を有す者と衆人と。
但し慌てばば走車を止ふ。親兵備が保當の是不づく便宜をと煙裏う衆
聲高風を作り砾を飛舞。壁を起と音をうねれ。周見平野思ひ立つて敵を攻め
走車を走る。

せん相手の敵の主馬を脅迫を背うて、行客をあはれ敵と思ひ先返し合ひを甚
きなどとひそむ。又行客は客なり。側杖行けとよと走。程趕せ車崎の園まゝす。然本の園の頭人
根古下鶴宗を松准を相資して大江親兵備と相挑む鬪戦を申るを那坂の
大見立あひて。車崎が院奉は其路仙頭すすみ遠望の事と見度へ鶴宗惟一西隊の壁
卒の敗れ自家の裏に下す敵を懲りて同を焼ざるを運寄るをすむ今大江一里。
まつ勝を取るを乞ひ。那大敵玉城城は急に引ひ免を旨ゆんで思射ひる敵ひやく頭怕れ。豈足
也。大津に逃走するが大津も加勢と木治の大枝入道が一隊の殿主も是公為す故にとて
自方の旗兵を大津の風と破れ。主客の戦ひ地を易らむ智恩と更に差別を。首
公は越の恩よへ柳大江親兵備八益世の勇士とよども那耳只一軍や。二軍。三軍。四軍。
敵を攻め。主機を敵とらえ。且がさ。二軍とち破り。推。尾をかみだるる。分
初の音有合ひ。一朝もえ。後後も吉一朝よをまほ。本末とも照し見る。

同謀材。題却入はれ。兵衛が三弓。箭緝捕の士卒の圖。做りて。不
走。其役を踏き。大槍の馬。未せば。本隊。左在。幸運。勿れ。驚と驚まし。まぬ。身方。
驚と。門戸を開んと欲す。人馬けがれ相違ふ。左右あぐハ扇に合ひ。車子も。左。原
道程。馬。親兵衛。無稽だ。馬。開ル。駆入候。柱。敵を以て。又。打拂ひ。敵退せ。
方。馬。御。九。津。方。赴。大。竹。入。道。見。沙。堤。奴。聲。震。大。
唯。を。斬。う。多。兵。威。三。隊。の。士。卒。が。見。を。東。ル。一。個。の。敵。を。撃。め。が。熟。後。難。免。人
志。あ。ん。者。我。續。け。と。鎧。被。馬。又。拍。れ。追。東。ル。惟。一。鷙。宗。ひ。窮。と。二。隊。の。親。兵。を。年。達
一。句。氣。が。り。競。百。十。數。名。喧。き。づ。く。人。馬。が。走。向。既。一。程。母。被。し。時。親。兵。猶。ハ。馬。鎧
面。を。來。旋。す。一。馬。向。ひ。若。仰。日。人。先。度。一。櫛。頭。を。穿。不。皆。驚。り。ね。ど。の。を。も。敵。を。意
敵。の。櫛。物。驚。不。惟。相。立。了。櫛。を。指。親。兵。衛。を。刺。と。便。上。競。竹。之。後。方。處。等
馬。蹄。の。音。あ。く。ア。ル。參。跡。力。答。せ。そ。大。生。恐。姑。且。片。利。云。み。く。來。モ。う。や。

さひれ あひ あひえ。だまふ あひ。
くの住而政元ハ先ず。親兵衛ニシテ向ひ。類術うり安房の名臣多束。堂室を那處
と申す。されど。我既ニ自鷹立てえば。その欲びをひんとて。進つてあらう。方々
對面の車の形迹を。我既ニ自鷹立てえば。その欲びをひんとて。進つてあらう。方々
馬頭人等が懲る。其罪輕も重も。開ハ黒日誠歎也。
あひえ。我面を顧。權且用捨。せよか。どひたゞ寝兵衛。其日。及びて
まよ。おまへ。かゝ過る御銀命。面目。乞は。夏至。既ニ知せ。又上ハ宣不解。又及びて。
人説。謂。本の願ぞ。那鬼を射て。繫を水。正義。かけ。年。當紀二十六。那鬼は智寧ら
ある。且。今。か。今。劍早天。一御見付。あひ。更。而過ら。まく繫を水。藤。諱。塔の邊。まく。あひ
き。そぞ。まよ。あひ。か。まく。し。か。集。金。使。を。積。て。蟲。其。

人説謂公の願を耶鹿を射て葬を許す事叶ひ。年高紀二十六之郷里す智寧
あつ里川今朝早天。朝早村東山へ遷らるゝ事より葬證據の追付とある
集耳を研拿く懷ふく。其の邊をまわるかきは実檢使を請て遣す。其
人とも是の後反て我三子を伴ヒ再同名也。猶可。厚本大集を西風合
テ。楠捕ましセシム。既に取締り。其の事は實の風を尋ね。之を
えども未だ。一例の敵手も敢言ふ。且齋也。下木落。トマサニ。二体の前を被



和尙伴當 懈雪代四郎與保生
且他ちん娘を賣給す
事達ひはあさまで徳が堅罰が虎狼野獸の事の顛末
まは山取堂よ徳ひオ那虎撞見して徳用へ隻取堅罰へ隻足脚を
喫ひ化して在りる雪吹服も氣絕して又活つてもかむすは和郎の伴當田の内中か
里ある曉雪直塚分六セ石ノ和郎の先途を遇んとく昨日歇宿を立たず
白川宿夜會すより尋き那取堂の頭よ奈良量素代四郎が和郎不愛す
と云。神箭をもすら傭の元を起して直塚配二十六。久義をもす。兩個の廻僧よ
あふとて以て。講りそ他うごくの日暮に誤り許妻恩の趣を立たず
其の後一格事の敗堂ふ旨書付し。但僧の伴當與保生と告ふ。其を知れど如
りと承る。柳徳興堅刑ハ和尙よ。着合をめぐらす。勝利談言を乞ひ。我
も居候。其事も敢言。皆伴當也。と聞ひ。知郎を歸り。ト量素

徳用堅削。其又は隻脚を鳴り給ひて。若林丸て樹下に居り。代の兵の
大隊の、番兵二名有。之等の伴兵を直ぐ二十六箇様々の計算計を以て。西陣作
研左衛門益の顔末を招す。致き事うと云。且紀二十六を和兵の上を防ぐ車の無を上
モ吹きとく。急ひ。山路をかづかへる。兵庫産略を告ぐ。が我則伴の士卒。七八名を若
們へ。遣徳用堅削を西陣より。是れ有司が告ぐ。牢獄は毎系せ。そとせむと分往。ふ
基者則其頭。是れ甚も事くとを今まら。兵船へ繕ひ。壇や籠よ造りて。兵て西陣の兵備と
共載々四個。收容せ。是がて西陣へ領てゆけ。有得一程。我西陣自即ち。
兵。僅ほの盒子偏旗の月前。繫て餽る。士卒五六名。奉手て。まよけれ。兵件の敗
合。あす偏旗を廢す。怒寒と。復た且。先和。当代。即ひ。御て和兵の伴當田の當田晚功を
諭言。酒盃を合ひて。みどりよ。我伴當田。各々。合盒子を。もと合ひて。題を。突。代
郎と。其大隊の五個。准備の盒子。そればと。千を合ひ。出でり。起食として。登時我丈

事より猶御用と譲り合ひれにを相異まし。とくえ、王害累紀真留等輩へ
直道と同士輕りせれとて其隊の殺兵の為々歿する。親兵衛はよ取る。
かのまゝ後日見れども我偶あまく車馬よ親兵衛が虎を對治ましや否を見ゆ
せば。かうもんへ遠慮非也天の明るとも山又山又見ゆ。さくら連々をと
四哥們車馬伴帝曾宣示。うそを取堂を立す。馬を山中遊のま秋の程
白川村。天の明り。清和す前百あ車の里人。が路傍に寝て。我伴當に告ぐ。
我れより。相公ハ西陣うる官領様うんと見なむ。よう宣下上べ。一権事待つ方體
我請る。おの身度。大は殿の伴當。直塚紀二六と呼。做と若西風。馳れをじて。
其所いり。同様うる便りよふ。おの時天の親兵衛。那日參り虎を那里まつて
寛へぬと。車のたまをす。隨み告説。又。馬をす。那直塚。いれ。口。の
傳の阿館へおの身を告ぬ。大正三。唱ふ。と。餘め。と。虎の跡を下。主ハ既に歸

久を急ぐる。秋天の明月待て。奉ふて。是れのじきこの事もあらず。と
足りず。すうか威も。すまくも。まご。まご。程物も。又も。未だ。未だ。
車官上の事か。とつを。らす。代西門。が教し。课り。あく。先や。布告。税。モ。疾
故講谷。赴く。被免れ。虎を見ま。思。が。先伴の音。侍二名を召。而若。が。舊跡
考か。の。明。宿。衆中。途。伴の近習を即へ。延。那奇。雖。と。す。年。と。分。付。其
某。御の。果。昭。よ。達。也。傳。と。謀。講。谷。へ。畢。ち。と。と。う。る。と。と。と。と。と。と。
血。筋。の。一。膜。渡。伯。部。十郎。真。忍。を。敵。く。爾。は。邊。白。川。村。の。壯。客。と。ヨ。メ。の。召。聚。來。令。や。
談。講。谷。へ。領。て。參。れ。我。其。支。役。を。虎。の。嚴。を。昇。と。て。京。師。と。齋。と。兩。醫。所。幹。の。憲
覽。よ。紫。鷹。且。洛。內。洛。升。官。鼈。職。見。せ。徳。ま。の。講。林。と。徹。ま。く。疾。と。疾。速
セ。と。翁。才。ア。殘。一。留。わ。我。亦。の。出。要。よ。難。を。昇。れ。代。四。郎。自。他。の。保。當。わ
が。鳥。よ。あ。の。後。者。へ。み。わ。の。我。住。當。の。寡。は。年。か。セ。而。次。雅。と。繰。遣。

眞思

直

至丁アキヤモリ木内を理トテ既而テ已聞左側後部十郎白川村主在室
三千岩許但て未だ又作ル所事モ合体ト途ト即ハ尋カシ習サ某甲
奇跡と撫ニ鳥村チ要急ト來テラ吉時某こと便ニまよナ他ヒニ連
夫ハ我志向トテアリハ索性チトイシムサトニ氣を撫ノ皆の追者多得白川
村主支役们まごも驚かニ智萬射義を感テ攝テ撫ナシ。是時我又後倍部
其二條の箭之得ナ。御前ニ目撃シ敵力の壯大。即ち矢を唇子全副手て復勝
虎の前へ踏草々鼻立反らうテ。案をと要く程子と被櫻く御令と打レタ。
其其二條の箭之得ナ。御前ニ目撃シ敵力の壯大。即ち矢を唇子全副手て復勝
虎の前へ踏草々鼻立反らうテ。案をと要く程子と被櫻く御令と打レタ。
役の在る立木名刺奉還を解説。我ニ寄テ虎の四足ヒ一縷。大家囁ニ笑ひ。西田下ま
官程み詮ヒト。伊勢虎ノ名草ナシ。ゆえに極め難い。壁の底カテ。往方ヒ御成母異

不可思議只見のこゆか。近習持司御輪の相充頭を聚ニ加。其百騎に向
父虎主 菴を食。落葉入聲。且體。其生。處。不。可。知。也。御
傳。其。始。也。其。傳。也。那虎。故。西。の。變。化。之。初。眼。ニ。點。サ。テ。於。靈。備。ミ。此
是。未。知。也。然。兩。眼。ニ。射。中。セ。瞳。子。ニ。表。シ。花。ハ。其。靈。鏡。ハ。無。也。されど
財。僅。有。也。僅。半。有。也。男。ま。う。弊。神。通。ヒ。然。ま。勝。徳。れ。ハ。多。む。星。就。子。大
河。九。木。東。反。這。物。也。奇。主。一。思。ふ。等。そ。と。今。衆。全。不。知。我。や。う。の。日。云。若
長。の。奇。軸。之。用。以。て。見。た。の。近。習。が。あ。う。以。の。名。御。輪。を。與。其。頭。あ。る。樹。の。枝。を。接。せ。を。
主。僕。齊。二。う。裏。不。果。セ。虎。ニ。画。幅。は。復。り。モ。形。狀。シ。ニ。異。色。と。く。其。眼。シ。亦。如。也。
白。眼。ア。テ。瞳。子。ア。リ。全。不。算。那。時。所。會。產。シ。云。集。文。耳。ハ。獨。向。ニ。見。し。時。ハ。不。ト
壳。圓。柄。ニ。接。シ。及。ひ。そ。モ。一。年。も。亦。不。知。只。真。刃。也。空。ヘ。一。金。叉。ハ。刀。原。
ミ。テ。身。之。指。セ。ガ。モ。仰。ハ。高。ニ。立。ト。金。管。ハ。和。音。ハ。櫻。カ。シ。高。ニ。集。文。耳。ハ。方。モ。

あり。窓より所ゆる。伊集又耳の邊に。奇興と稱り。あけを。向て見た。諸
事。後。草堂體の入る反ひに。續も。詮。接ひ。集五才。刀痕亦是。之に
ひ。是を。是を。自然作當。代四郎。數二六真。を。す。す。ま役。ま。ま。噫。
言と。感嘆の聲を。合して。散動。なり。否。時。我。又。思。約。莫。毒。大奇
太宰。皆。是和郎の。氣。禮。す。工。下。安堵の。累。做。や。れ。升。儀。舊。東
前。後。と。議。者。有。因。伏。實。四。罰。差。別。の。詔。を。免。れ。と。あ。へ。非。物。不。能。也
退。東。馬。を。放。る。よ。も。被。一。往。者。當。む。う。が。は。は。と。遠。く。か。や。べ。ぐ。そ。我。追。見。そ。
見。ち。の。奇。異。を。告。と。う。そ。は。よ。答。る。送。行。の。發。を。果。え。と。既。よ。尋。思。を。き。う。く。零。
き。ぞ。ち。一。座。坐。ま。ち。而。身。暇。を。取。セ。く。自。川。村。へ。か。ー。ま。と。近。習。よ。併。の。兩。軸。と。持。セ。て。
代。四。郎。並。自。化。の。土。卒。を。相。從。ひ。馬。を。早。り。て。山。中。村。ま。で。來。る。程。あ。土。民。筋。西。ニ。名。路。
宿。十五。日。い。うち。諱。言。の。算。つ。ぐ。い。保。通。書。向。せ。す。目。今。年。一。個。の。最。年。で。極。捕。と。二。

制度

且善

西

事戸へ附る。其の後、食事端十一郎照文は從事を差遣せし。十日後、別途に、
近づいて、何とお詫びをうながす。とて、其を京師より留め、大儀の詞を書かれて、
先づ、僕の老母二人が墨表にて、何の奇子崎ゆき海野の筆であつて、と照文と相
撲せ、勝敗を對む。功をうぬばす。又雅あえ興味ある。亦極もとれいへ仁不寄
優ゆる。面目ある。と、是政元主所へ、膝拍鳴し、感嘆の声をまわす。
とひら、歌をうたふ。一一個の近習が、身を起して、代わる。其の後、
數歩とて、袖をとて、車とて、連々と、さきとて、次元を起す。あくまで四郎金老れ
里見の家臣あくまで巡回親兵衛が上京の後見をあつて、又絶えざる事。
十一月の吉を以て、も難能の封駕をうながす。御風太く、子孫の事。高麗の事。
其の後、二度の大功寔は城を異日は軍家を上り、御風太く、子孫の事。
先づ、左馬左方、先づ、左馬左方をさる。とて、政元は、
彼へ喝ねて、又留まらず、由をゆく。といひて、腰を卸す。腰の緒を緩めさせず。よ親
兵衛、克は是官府の意、遅脚と用ひて、早急に其の御是義を外す。今日は算を
將へて、火急の公駕を乞うて、五歳七歳不眞當にて、其敷才は二十人。
一百の御使は、用ひて、寶を供奉する。用意せず、布席を送れば、最別と做して、充東西をし。
則て、そ和昂と清元、東海と趙川、伊勢と大富と、尾張と斯波と、駿河と今川。
甲斐と武田と、伊豆と北條と、越えと、近江と、吉野と、丹波と、淡路と、和泉と、
敵國の備とを、あれ故に諸國の使者、他御の行客往來の、不貞の生えあつて、
矣と、用ひ者と則て、又年々、車をもとめて、御殿をう柳留せしを恒例。

西

西

嘆く堪也

トシテ、のうちこそ、あるえべ、まろとこも、おらもと
アムニテ、表して、舊れへ退ひて、當下親兵衛へを胥り我寄て、爲ふ歎きと嘆き。
相公御靈命、他等が工はねば、故御へ飾る錦は優れり、猶この上は願えへ
日も早く、安房へ退き、使候ゆ役を裏まくと、承認をもつて、と詰め、政元は、
彼へ喝ねて、又留まらず、由をゆく。といひて、腰を卸す。腰の緒を緩めさせず。よ親
兵衛、克は是官府の意、遅脚と用ひて、早急に其の御是義を外す。今日は算を
將へて、火急の公駕を乞うて、五歳七歳不眞當にて、其敷才は二十人。
一百の御使は、用ひて、寶を供奉する。用意せず、布席を送れば、最別と做して、充東西をし。
則て、そ和昂と清元、東海と趙川、伊勢と大富と、尾張と斯波と、駿河と今川。
甲斐と武田と、伊豆と北條と、越えと、近江と、吉野と、丹波と、淡路と、和泉と、
敵國の備とを、あれ故に諸國の使者、他御の行客往來の、不貞の生えあつて、
矣と、用ひ者と則て、又年々、車をもとめて、御殿をう柳留せしを恒例。

卷之三

十五年下書同日去而稿成於此十五日

正月十四日未下刻

あれは別途里の宿を定め主催實を坐す。二月三日得て居候事ハ多
不帆き貨物を廻程み奉り入れて豆草で御ふ國程より日暮迄而子孫送代は
わきもよふて既に果せられ親兵衛代四郎と紀ニ六十五傳の殿兵七個の伴當
塔、但よ夕餉を果せられ親兵衛代四郎と紀ニ六十五傳の殿兵七個の伴當
身自邊へ招れ集合して久く京師ニ在り程の心疲れと同感り且昨宵の挙句を
嘗てより代四郎並よ衆兵伴當们が昨宵親兵衛の談講各々虎と對面
爲体及那緯捕の風令を聽ひまづけ。事の顛末トシタマツル鷹の官領左近禁元の觸
へて。兵衛と同答ふ其山崖壁を落れと側廻をれども立よ達りて猶其事の
詳る。すれども。奇特を感じて。开始より伴當们が紀ニ六月昨日また
京師に在りて車情を語り聞し。是も亦親兵衛の先見遠慮也。とて。惜
うれ。すれども。地よ他を照文を唱へ。別處を尋ねて。其役車をすりゆく。騒ぐ。嘆唱
之を。疑ふ事無事。至る。宿せば又アラモキナコを親兵衛にて含味。かく紀ニ六月見

留人と告げ、復讐をすまされると、久喜勘定院を率て那時周の爲体風を卒
山の周うて、謀合平すやか見已解^了及^てまぐる。人往還を歸^まし、周
の風を待^まつて、候客及^て候の事^事の聚合^{あつ}は、是^はあ然^{わざわざ}人馬の勢^し也。
御内者^{うち}者^{うち}の選擇^{せき}が、自^じ身^しの便宜^{びん}み^みび^びと告^げて、代^し身^し紀^き三^{さん}六^{ろく}騎兵^{けい}们^{めい}を
もと。親共^{おなべ}衛^え厚^{こよ}重^{じゆ}と、喜^き事^じ大^{だい}事^じの義^ぎ、是^は日^に兩館^{りやかん}を
貞^{じやう}實^{じやうじやく}。とも直^{じゆ}塙^たの西^に流^ると、先^さ一^{いつ}の大^{だい}功^{こう}を^を、且^す自^じ説^{せつ}^しを^を、
地^じの富^と義^ぎ一致^ちの大^{だい}成^{せい}り^り。御内者^{うち}者^{うち}の義^ぎ、是^は日^に兩館^{りやかん}を
上^あが^が御^ご中^{なか}を^を、是^は日^に兩館^{りやかん}を^を、每^{まい}人^{ひと}今^{いま}不^ふ諱^ひを^を、候^まる^る。御内者^{うち}者^{うち}の
是^は日^に兩館^{りやかん}を^を、則^そは是^は財^{ざい}神^{じん}の眞^{まこと}助^{すけ}り^りと^と思^{おも}ひ^ひ。野^の丈^{じやう}も^もは^はう^うが^がの^の者^{しやく}、あ^あと^と想^{おも}ひ^ひ。是^は日^に兩館^{りやかん}を^を
も^もう^うか^から^ら、御内者^{うち}者^{うち}の^の義^ぎ、是^は日^に兩館^{りやかん}を^を、當^あ地^じと^と云^い候^まる^る。馬^ば脚^{きやく}を^を露^あさ
か^かれ^れ、御内者^{うち}者^{うち}の^の義^ぎ、是^は日^に兩館^{りやかん}を^を、當^あ地^じと^と云^い候^まる^る。

下司^し官^{かん}、^{かん}と^と美^{うつく}い^い峰^{みね}、^{みね}主^{ぬし}の^の臣^しと^と、^と之^の故^{ゆゑ}に^に陸^{りく}を^を、^と國^{くに}裏^{うし}で^で生^うま^まる^る。
氣^き急^{いそ}、^{いそ}屢^{たび}黙^{だま}り^り然^{ぜん}り^りあ^あむ^む。思^{おも}ひ^ひは^は優^やう^うで^で、^と是^は四^よ月^つ、^つ才^{さい}君^{きみ}都^つ、^つ那^な様^{よう}と^と稱^め。我^わら^らの^の御^ご軍^{ぐん}、^{ぐん}備^{そな}へ^へ、^と是^は日^に猶^まむ^むか^かて^て、^と是^は日^に、^に國^{くに}賓^{ひん}遇^むい^い隨^さ意^い。
我^わら^らの^の御^ご軍^{ぐん}、^{ぐん}備^{そな}へ^へ、^と是^は日^に猶^まむ^むか^かて^て、^と是^は日^に、^に國^{くに}賓^{ひん}遇^むい^い隨^さ意^い。
我^わら^らの^の御^ご軍^{ぐん}、^{ぐん}備^{そな}へ^へ、^と是^は日^に猶^まむ^むか^かて^て、^と

あらゆる
金なる

代四郎軍兵を威して已まを死ニシテ太保堂に守り西日出は金一百十数両を
留りかゝと思ひ乍ら物且しく親兵衛の勢賜財事務も一束の金一百十数両を
合ひ是を代四郎示してゐる。日暮裏は代四郎の便命を奉り一時車をじ
日の准儀をせよと老侯の馬車を以て腰よりれども政元主と仰留
やれど那郎よりて日暮未食ニ医へられ敢用る所なく。舊の宿を
今未至。因て書吏の明日ちとまもく京師へ遠くを令ひ那裏
事の移易り去れども去向猶新風と風り幸ひて政元主の
道を貸す。腰よりれども心に以降諸國乱れ諸侯割居の空の
事の腰よりれども心に以降諸國乱れ諸侯割居の空の
世ノ天子將軍の命令も行ひれど無事後化又去向か。不測變
也。次第も亦知らずを宿吉向すと車内と我主健相續。金西落

ハ故よりあく。何より食を求へ貰む可れ盤纏の各の取扱い準備
あるべれども事は宜ととばれ今も脚金を配分し各の盤纏より
も亦誰の脚思へん。とひきの裏を傍る金を數々先代四郎ニ二大金紀
二六十五金土參駿大三十金五個の親兵と一個の伴若百里又各七金良誠
伊の文記每五銭立金と一取又尚残金を残すを終財盤纏もも廻て
又腰よりれどもも營業の實様もを悟り得りうつてありの外の理
五れども廉直とことえ代四郎を舞す由を恭く受取ふ。品
子の遠謀自らのうち令が權且脇櫛を路す用ひ御りて異日安屋へ
歸着の日四邊へと答へ懐へ來り。代四郎よりの如きの説亦
推察えん。皆其侶は後悔す。感謝の意を表す。田下親兵衛八郎。
今宵は歌唐が廣がやと目廻歌に行ひ。主上へく歌傳。主上と大河相

様のもの。それから密談を終まし、とて京都へ去る。
改めて上りゆき。京師の喧嘩とへんせ見舞はる。第一義は各の意を
ゆふべし。我危既に釋さり帰る。知る。馬の千里の駆足。一日は
毎房(運んで)。各自易かべく思へども。谷とか我與み西より京師。淹留
す。百日有餘を過ぎ。また中途に捨てる。我のさし單先も帰國して
い。我はゆき。便れが明日から翌日六十里(三十里)。てゆとて。主の内す。
還り易う。きよめぬ。とおも大家感服。をす。かく神を祀り。和
焉の意見。徳をもんや。東夷(ひがしや)を答え。日よ鎧と人安の鐘の聲暢
ひまつ。さす。親兵衛。城番とて。鳴をさす。五日稍定
先店での事。それが臥草席をし。て客枕は就なげ。ほて其詩。大江
主僕十六を取ひ早起。起ぬ。早飯を果。奴隸(ゆゑい)名車走ら。織田の
店を出で。故郷(ふるさと)不遠か。と。一千里と定め。が取れ。さあね。馬
駆足。吉(よし)の日未下刻。早も十二里。伊勢の境。と。今。左側の
石井師と。字せむ。一村落を擱(とど)く。路の右より一度の佛堂。て。右側の
石井師。如來立像。ハ地の土を無(む)事(じ)。親兵衛。云々。時憶。馬と
お。経りて。お。代四郎。と。ゆく。と。喰く。ゆく。喫へ。食つ。宿。御虎
の末。丹波国(くわち)末田郡(すゑだぐん)。せ木館(せぎやかた)と。鳥居を構へ。一佛寺。瑞瑞(みずみず)。山东(ひがしやま)師。篠(しの)山(さん)。馬(ば)。
お。お。白骨(しらつき)。石井(いしい)。御(ご)堂(どう)。か。方(かた)。お。お。か。か。か。

あらそひまへ。と。お。あ。各(ごく)り。お。せ。做(つく)。身(み)。甲(こう)。を。よ。お。是(ぜ)を。要(い)。と。皆(みな)。常(つね)。行(ゆ)。橋(はし)。を。す
甚(ひそ)か。太(おお)き。兩(ふた)個(こ)の。書(か)。黒(くろ)い。馬(ま)の。左(ひだり)の。従(とも)じ。紀(き)。二(に)を。被(は)。と。躍(は)。代(だい)四(よし)郎(ろう)。先(さき)よ。うち。鎧(よろい)
鎧(よろい)。甲(こう)。由(ゆ)日(ひ)。櫛(くし)。箱(ばこ)。行李(りこう)。と。各(ごく)。駕(か)。役(わく)。役(わく)。皆(みな)。親(おやぢ)。衛(え)。相(あわ)。保(まつ)。と。俱(とも)。駕(か)
店(てん)を。出(で)。故(ふる)郷(さと)。不(ふ)遠(とお)か。と。一(いち)千(せん)里(り)と。定(さだ)め。が。取(と)れ。さあね。馬(ば)
駆(く)足(そく)。吉(よし)の。日(ひ)未(み)下(さ)。刻(とき)。早(はや)も。十二(じゆう)里(り)。伊(い)勢(せい)の。境(さへ)。と。今(いま)。左(ひだり)側(わき)の
石(いし)井(いしい)師(し)と。字(なまえ)せむ。一(いつ)村(むら)落(おとど)き。擱(とど)く。路(じゆ)の。右(うみだり)より。一度(いちど)の。佛(ぶつ)堂(どう)。て。右(うみだり)側(わき)の
石(いし)井(いしい)師(し)。如(ごとく)來(き)立(たつ)像(ぞう)。ハ地(じ)の。土(ど)を。無(む)事(じ)。親(おやぢ)兵(ひょう)衛(え)。云々。時(とき)憶(おく)。馬(ば)と
お(お)。経(くわ)り。て。お(お)。代(だい)四(よし)郎(ろう)。と。ゆく。と。喰(く)。ゆく。喫(く)。食(く)。宿(しゆく)。御(ご)虎(こ)。の。末(すゑ)。丹(たん)波(ば)国(くわち)。末(すゑ)田(た)郡(ぐん)。せ(せ)木(き)館(かた)。と。鳥(とり)居(ゐ)。一(いっ)佛(ぶつ)寺(てら)。瑞(みずみず)。篠(しの)山(さん)。東(ひがし)山(やま)。馬(ば)。
お(お)。お(お)。白(しら)骨(つき)。石(いし)井(いしい)。御(ご)堂(どう)。か。方(かた)。お(お)。お(お)。か(か)。か(か)。か(か)



て恩命有歎無。はあくまの事。是れは甘利也。佛若
薩は侍候す。宣教と祈る。すみ思ひ。ことわたりか。是れは是れ改め
よきんに騎相見ハ快。そぞ一等時。すまむ。謹候。と。詞。まご。詠らふ。杏
後方より騎馬の勇士。ゆ定。怪。を早め追薦。まわ。至。堅。跡。音。近。ア
程。ゆき地聲。と。裏立。て。大江主。櫻且住。己。敷使。と。喚被。け。是。モ
駕。く。遠方の。主。櫻。内。齊。一。行。と。見。れ。但。見。ち。其。武士。の。京。様。多。頗
り。白。帽。す。と。戴。姿。舞。姿。の大。敵。の。道。筆。の。西。袖。と。卷。祭。祭。の。盆。達。達。の。上。下
ぶ。の。長。袖。の。下。に。印。引。打。の。腰。墨。御。の。西。刀。て。舞。長。桃。花。馬。不。黎。地。の。勢。の
き。お。み。た。と。銀。さ。て。磨。出。ま。し。波。隨。よ。知。島。ゆ。正。直。多。の。長。袖。墨。御。舞。是。則。更
き。を。秋。微。得。御。日。廣。當。人。觀。兵。衛。ハ。思。い。色。豫。画。善。る。廣。當。が。邀
け。ウ。今。飭。免。本。事。車。の。多。を。説。免。ど。教。使。と。叫。ト。ア。チ。早。く。リ。馬。よ。

御定が御の儀の儀已と。事に博く事ある事かと。事やへ説かども。
ノの御方と御見え。代回平を。六月。身と起一月。御御御
事。達ち篠子。御と接。推所。心。左大御門。跋坐。至。時。御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御
御御御御御御御御
御御御御御御御
御御御御御御
御御御御御
御御御御
御御御
御御
御
御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御
御御御御御御御
御御御御御
御御御
御
御

年齢二十里也
支那の事

志朝ノハトモ十過。日時候。日。一宿を隔。了。之。此心許す。因
あ。直の足。櫻は健。通。氣。まく。程。馬。よ。逸物。午。里。能。未。
ま。休。當。凡。皆。後。走。續。み。と。日。の。三。時。過。る。矣。對
め。下。と。左。れ。ま。と。右。て。左。れ。ま。と。右。て。左。れ。ま。と。右。て。
面の本意を察。は。然。是。寢。覺。を。キ。ナ。卒。先。右。上。見。れ。と。乘。意。を。示。

志々懷より今ま中。恭く源氏親兵衛隊を率受難於左右
ひり、身を下す四下を見る。臂月近き晝餐、笠櫛の自達あり。方食脚持
引上り塵吹拂して徐々走る。載車の如也。謹子辨見も。宜上車道
上車皆里小路二重相。文明十五年十一月二十六日宣上旨。里見安房守
又名之。原朝良之使臣。大江親兵衛全義。宿禰仁虎歎歎。功有
之。事達。天龍爲今古一人者也。宜叙從六位上。爲兵衛尉。
藏人右少弔。藤原朝臣。叔豈。奉とも。這首。添らるる足利氏。將軍
義高

御
金
宿

卷之三

御教書あり其文重慶寧印成狀より。又領宣く脣上處に傳。凡て其載られ
る勅典六齋三通を用。一記て在所の事。其事之長篇。尤もうち載て未備ま
れども返して是の事。ひしきを勅賞一台命。而目を上へやむべしとす。靈虎
齋がの一権車。只是左京北政院の送り。道偶の處。答ひ。又之義よ
よあく東宮。櫻なると。鏡され。是十二分の送り。又。聖因。有。及。バセ
申。黒。ト。シ。ヘ。ル。階級。は。ア。シ。ヘ。レ。知。那。虎。原。の。頂。ス。ア。タ。ミ。良。既。安。堵。ス。
ひを。做。サ。ル。則。是。八。千。上。皇。立。帝。の。御。聖。德。及。附。軍。家。の。御。武。德。モ。臣。ラ。耶。做
王。事。ナ。主。多。シ。義。寔。一。義。威。入。ソ。如。事。の。鑑。澤。モ。ア。ヒ。丈。篤。バ。臣。モ。功。エ
キ。モ。功。ナ。カ。モ。知。ク。ニ。這。恩。宣。貞。正。宣。不。ト。不。ト。身。の。利。モ。欲
キ。モ。欲。ナ。カ。モ。知。ク。ニ。這。恩。宣。貞。正。宣。不。ト。不。ト。身。の。利。モ。欲
講。源。舜。樂。皆。事。の。傳。誦。ノ。以。次。所。々。モ。ア。リ。早。ト。モ。シ。ア。好。ト。モ。

事御内へ實所の實本何時方忘。東ちして直後とす。午後亦當
おう和君の邊を看。君の風を想ひ根を立てて中景えれ。尾根
雜色瓦玉きんと風りあふ果と云達は。日の御使御人會す。我
云々と道理を陳て舞ひ實生を听す。權威と以強め。足弊。
となり是非處を多々を頬みかえて死にて志を果す。本心を
らむ。其猶是より遇る。我命運の氣を所終。併君が賜す。且取天火
と手て。謝ふ他車のうと廣當吹く點頭。被せよ。あるまじ道
理の有り。非理なり。和殿の推津東京。又ハ私。公。元。我身の
罪を怕れて。听より非理の人と云べ。取も覺え。今上。聖朝。御座を
且室町殿。賢相されば。因定。往きの事。よす。御代を。前ま
よも。如て御感ある。必ず。此の御事は御体の。尚に計る。今う

よひやてつ。よりが。和殿の去向を。信濃路へ赴き。東海道。還りと同。親兵衛終。
連の岐畠路。おどり。御膳あり。御食令。御事。主。舟を大津。到。時政元
立の。起。玉。東海道。う。繋れ。佩。御食。其故。首様
箇。想。便。主の。御。あれ。と。御。處。高。と。也。故。主。下
ね。我。田。山。走。東海道。伊勢。尾張。と。條。外。發。足。京。家
飯。地。御。昇。金。主。多。も。城。南。錢。主。出。且。真。御。銭。朝。連。
室町殿。へ。管。か。い。 **具教則** 十二。一。大。へ。と。至。室。主。御。銭。
私。て。一。箇。を。和。殿。と。貸。す。と。も。御。東。の。後。早。く。還。す。と。其。御。和。殿。の。上。あ。處。
鳴。す。尾。越。き。と。られ。て。幾。兵。宿。を。登。り。と。我。膳。自。か。く。和。殿。の。上。あ。處。
そ。う。ね。ん。と。月。あ。す。だ。と。然。と。よ。今。思。意。を。さ。度。思。か。と。う。が。又。騒
鈴。我。愛。主。政。主。遷。を。休。と。へ。と。御。御。御。御。御。御。

自そ我の本和殿へ達て。御子を辭く。詔旨。次に猪馬見めし。又
和殿の尾張より路を積み。まほ濃上四日を置。宿房へ累々。右も張り
斯段の領地人。美濃源氏土岐。信濃古村。木曾。諏訪。郡山。上
野。越後。新潟の處分定正主の封城。さて。皆是。京家の御方地人。事の便宜
猶且。未あ。今。番武脚使を奉り。和殿等を起す。而して。恩地を
逢ふ。五日。其遠近。御内官。御用。風符。と。候。又。左。右。今。要
在。東。西。北。南。是を和殿。よ。與。之。ト。那御方地す。と。遠風符。か。向。篠
立。あ。ば。先づ。の。意。を。ひ。の。と。詔。其。親兵。備。を。詔。其。地。を。遠。限
を。知。且。の。行。情。を。不。教。と。從。ざ。ん。と。お。な。う。ア。ク。見。と。お。ち。て。腰。腰。を
擱。り。馬。鞍。金。を。合。坐。と。坐。坐。の。隨。子。遠。樂。せ。れ。廣。富。を。懷。も。
御。舟。を。生。く。與。ち。吉。田。生。の。交。易。御。談。を。果。け。る。登。御。廣。富。天。

來
と仰がく。今ハ。も時。智。及。頃。者。の。目。の。恵。ま。首。と。ま。程。わ。る。そ。べ。の。幸。の。
伏。す。別。れ。そ。ん。ど。り。ひ。腰。身。を。起。せ。大。は。の。取。隸。ま。る。の。直。草。履。と。轄。
身。を。國。の。歸。す。立。つ。程。は。親。兵。備。し。赤。道。秋。篠。王。の。保。告。の。達。れ。
ま。さ。な。よ。我。保。告。の。申。兩。三。名。途。ま。で。延。ま。や。ま。よ。と。ひ。を。廣。富。を。更。む。い。
う。人。欲。と。を。ア。レ。ん。人。今。亦。一。騎。と。モ。獲。れ。る。前。の。ま。る。の。逢。バ。其。地。を。
駆。を。於。か。人。馬。を。據。て。明。日。白。馬。京。へ。女。の。う。ら。ん。あ。く。と。ひ。の。馬。と。
内。と。ま。跨。つ。の。も。を。一。駕。中。て。走。る。よ。の。と。い。ひ。御。車。と。親。兵。備。の。代。四。馬。
紀。二。六。以。下。が。御。兵。備。當。推。並。そ。只。顧。ぶ。よ。威。と。已。ぞ。錦。上。車。と。
深。雪。中。よ。山。底。を。歸。る。御。兵。備。を。欲。不。良。思。信。又。一。段。の。鎧。簪。高。う。那。寶。
氣。人。親。兵。備。が。采。利。を。欲。不。良。思。信。又。一。段。の。鎧。簪。高。う。那。寶。
氣。人。這。寶。と。十。才。と。お。び。よ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

分兩頭。余程は行。然庄京太支政元の大。親兵也。別れ。方東。入
馬を走。即日京師を出。馬を走。花の河所。草。將軍義高。安
上。里見の使者大は親兵衛たる虎が。對治の大。草。ま。將軍義高。安
賀。花。被殺の頃。人ちと同士。敵の事。且。那。戰兵。公。連謀の事。又。恩
信。德用。既。前。落。先。展。趣。主。其條。之。滿。と。中。大江
親兵衛の智。勇。義。急。躁。之。稱。之。相。之。復。一。虎。の。面。軸。て。止。是。脚。是
入。れ。れ。虎。公。堅。嘆。一。身。と。大。き。を。も。避。即。官。鶴。白。島。山。左。獨。音
政。長。も。一。件。の。面。軸。を。禁。程。御。所。へ。ま。よ。晝。駕。見。よ。備。の。主。改
三。下。う。者。官。署。參。り。よ。お。と。考。み。ゆ。公。卿。猶。可。よ。詮。議。を。伴。大。江。親。兵。衛。に。宣
主。上。を。旨。あ。り。義。高。公。す。親。兵。衛。違。勅。を。ば。咎。め。い。て。及。て。其
四。賞。を。べ。と。詰。明。我。公。孫。將。昌。廣。賞。を。御。使。し。て。仁。を。路。次。是。す。あ
か。ひ。う。の。路。よ。上。よ。下。が。年。往。而。真。沒。の。日。す。廣。幸。皇。城。之。立。つ。是。則。大

江親兵衛の忠。義。為。の。罪。を。思。り。や。官。歸。跡。を。尋。ひ。ま。と。そ。切。う。と。圖
様。う。と。す。上。く。宣。旨。を。返。て。る。又。至。而。廢。へ。も。往。來。を。告。寧。と。御。教。書。を
返。す。ヤ。主。上。を。旨。あ。り。義。高。公。す。親。兵。衛。違。勅。を。ば。咎。め。い。て。及。て。其
忠。信。を。深。く。御。感。聖。涼。が。重。く。安。房。へ。御。使。を。出。遣。る。と。義。高。と。
東。國。す。赤。久。れ。れ。人。馬。の。通。路。不。便。の。づ。え。ち。愁。百。里。の。命。を。寄。さ。る。
無。能。む。る。所。教。され。朝。議。果。さ。ど。う。な。と。當。也。都。を。尋。う。け。往。而。廣。吉。國。
萬。日。政。元。の。即。よ。速。く。對。面。を。講。う。と。生。ず。昨。日。在。下。御。使。を。奉。り。那。大。江
親。兵。衛。と。走。る。石。某。師。堂。大。對。高。折。他。ユ。離。れ。る。又。お。ん。お。ん。お。ん。お。ん。お。ん。
其。構。を。貸。り。と。云。畢。祭。を。す。地。東。海。道。を。か。づ。く。も。歸。國。の。後。遠。く。
逐。ふ。ま。と。お。見。ま。か。り。然。と。と。き。宮。院。を。留。指。す。又。と。返。青。高。祭。成。
身。の。罪。と。き。べ。く。大。今。も。亦。ふ。ま。ま。と。う。と。化。而。す。と。もの。が。お。ぬ。日。月。水。

ある。と所坐を尾に東海道を廻る。往復の事。へ先に原方を書く。之。
想公は近まやをひねとく。在下に處。其の上に大に久遠に定む。之。
第一相公の爲め。在下則安命す。之。又其の上を收め。之。此正
音。又かきと仰て。騒ぎを含むて。遂に。之。度。之。而。之。之。之。
う。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
折玉政。親兵衛。昇殿。之。廣當。之。別役。之。御當。之。御。之。之。
廣當。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
取又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。
聞。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。又。
一陳良の罪を諭。斬。之。旨。至。而。斬。之。同。之。則。老。松。惟。一。所。衛。を。召。せ。之。
聲。を。研。親。の。周。け。れ。虎。て。矣。掠。さ。う。士。卒。三。名。復。之。禁。獄。後。一百。皆。さ。く。追。之。
之。又。根。さ。下。鶴。奈。大。村。穂。物。の。屏。居。類。そ。そ。す。罪。を。然。ば。是。續。行。之。

陸長
是
事
目
題
解
釋
文
獻

國を守廢して又國人を置き。北國の敵。瀕。之。境。を。犯。が。ん。の。時。又。政元。ハ
有司。命。して。高。ニ。牢。獄。ニ。用。籠。也。德。用。と。堅。剛。を。奉。主。す。其。積。惡。を
責。而。も。の。這。區。領。也。之。且。高。ニ。縛。ニ。縛。之。謀。之。考。之。要。車。を。告。之。
今。亦。難。處。き。由。テ。又。阿。容。を。と。招。了。主。め。ら。故。ニ。德。用。堅。剛。の。憂。を。首。を。列。
之。河。原。小。島。首。を。れ。し。管。具。難。香。西。復。六。モ。主。君。を。恨。て。出。仕。モ。還。モ。
老。病。つ。假。也。之。致。仕。退。役。を。諸。字。す。ち。政。元。則。復。六。分。二。男。香。西。再。六。政。景。モ。
本。領。阿。波。も。之。立。て。親。の。家。督。を。取。せ。り。然。が。政。元。の。行。所。事。八。公。モ。
假。れ。ど。の。約。莫。這。回。の。死。事。ハ。北。政。元。の。所。事。也。之。初。徳。用。ノ。諭。斬。
憲。客。ノ。大。江。親。兵。衛。を。義。留。よ。台。命。を。以。て。君。を。辱。罪。を。思。之。
以上。事。と。如。ミ。上。院。を。走。く。寶。賤。の。百。便。を。蓬。出。に。致。ハ。又。禍。傷。を。
甚。い。よ。近。直。義。院。を。原。因。で。之。而。之。主。す。曉。得。也。人。の。コ。を。言。宣。れ。い。申。す。



身の罪といふもやと謀る者見る所ハ宮中の三百戸の廄室が多所に及ぶ
身を犯れ、遂に久々出仕とも亦病看守假托て官領職を舞へ、宣旨より
かかし其頭職と罷られ、改長一人官領す。是よりて後三卷を歷く。
文明十八丙午の年より政元復官領す。やがて生瀬を打け。是より是
後詔の余程の那を瞳の虎の画幅へ。睿覺を経て後より公見御
父東山殿義へまかせゆり。義政好重の辭を以て西擧り。許す。常より
國風堂在す。掛毛筆。其書は詩歌也。行徳より程より。有一日紫雲主。大德寺の
一休老和尚と。跡をめぐらし。東山より。ゆき。の便宜をよし。の御銀閣より
自便にて。義政公と。安油禪城の如。譚無事。郊外に。野宿。一休老和尚が
東山殿を見たまひ。ひがの諭説甚廣。開いた下回。解説を聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯卷之三十終

一休
南總里見
八犬傳
第九輯
三十終

天保十己亥年
春二月三日稿了

著者作堂子集

筆福硯壽

大吉利市

